

前野蘭化の自画自賛について

木村陽二郎

前野蘭化良沢（一七二三〜一八〇三）の肖像画はただ一つしか知られていない（二図一）。それは大槻文彦によれば蘭化が自画自賛したもので桂川家に長く保存してあったものを、明治九年の大槻玄沢五十年祭にあたり、桂川甫周の曾孫にあたる同じく甫周といった桂川国興くにとから大槻玄沢の子孫の大槻文彦に贈ったものである。現在は早稲田大学図書館に保存されている。その図の前野蘭化像の前に置かれたものが何であるかを明らかにし、またそこに書かれた賛の「経営漫費人間力。大業全依造化功」（経営はみだりに人間の力を費す。大業は全く造化の功による）の意義を考えてみたい。



前野良沢自画像。まえに置いてあるものは何か不明。本図は舶来の洋紙に画かれている。（早稲田大学図書館蔵）

図1 前野蘭化自画自賛図『洋学資料図録』

岩崎克己かつみの『前野蘭化』（三）によれば「この自賛は自分は蘭学の研究には随分苦勞したが、それは兎も角目鼻を附けることが出来たのは、全く天祐である、と云った意味であろうと思う」とし、「但し之れは読む人に依って感想を異にする」といい、図については「自画像の前面に、馬の腹帯みたいなものと一緒に、ビール壺二本をその中腹に於いて切断し、上半を縄でひっからげたやうな奇態なものが並んでいる」と記し、三宅秀ひすず「蘭医家と理化学工芸及政治兵制」

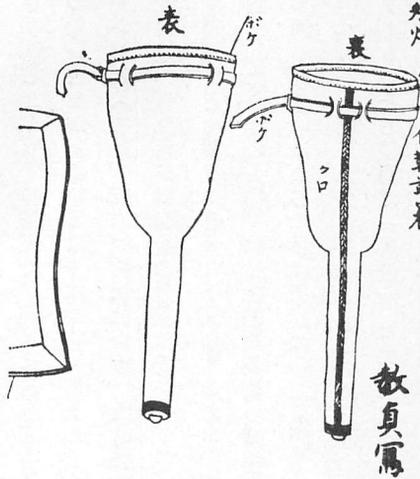
での説明では、これは革で作った和蘭馬具であり蘭化は馬匹改良にも力を尽したのであるという文を引用した後、岩崎自身は「成る程さう云はれて観れば、先にピール壘びんと思つたものは鎧あぶみのようでもある」と記すが、また蘭化が馬匹改良に貢献したらしい証拠が見出されないこと、また馬具としても、「絵画の前景としては甚だしく調和の妙を欠いているように私には考えられた」という。

私はこの図の意味を小川鼎三博士に質問したことがあったがわからないといわれ、解決のめどのないままに、昭和四十九年十月に出版した『日本自然誌の成立』^(四)の図の説明には「何か不明」としておいたが気になっていた。

^(五)小川博士はこの図を東京芸術大学の中尾喜保、三木成夫の両氏に見せ、先入観なしに判断することを求められた。中尾氏は馬学、馬術に造詣が深く、図の下にあるのは馬の腹帯で、日本や中国のものではなく、胡こ(中央アジアか)の系統のもの、この上に画かれたものは矢を入れる籠かごを倒たふさに置いたものと推測し、また蘭化の着ているのは地位ある人が馬に乗ったとき手綱をとる馭者の服装で、またその坐り方は腰を起している馭者の坐り方とする。そして賛については、「良沢が意味のない画をかいてははずはない。馬上の玄白たちは矢を全部射つくして戦った。自分はその馭者であるとの意ではあるまいかと(中尾、三木)両氏はいう。なるほどそうかも知れない。一つの解釈として、ここに初めて紹介する」と小川博士は述べられたが御自身の意見はない。

シーボルトとも親交があった下関の本陣の主、伊藤奎之允もくじちゆう(一七八二—一八五三)の四代目にあたる伊藤盛吉氏宅に長崎で画かれた西洋の人物、物品などの多数の画稿がある。それを拝見するとそのなかに前野良沢の図にあるものと同様のものが画かれていることに私は気がついた(図2)。それには「馬上短炮せちへうノ筒 但鞍前着 敬具写」とあるので、馬の鞍にとりつけられていたピストル入れとわかった。さらに調べてみると、杉田成郷なり、市川齋宮『遠西武器図略』にピストルの図があり、その説明は「馬銃」と書かれている。また林柳圃りゆうぼ『海国兵談補遺』には「鉄炮入」として、それには小字でピストルホルストとあり、馬の鞍に着けられた図(図3)もあるので、蘭化の前にあるものは馬の鞍につけるピストル

馬上短炮ノ筒
但鞍前着



敬貞寫

図 2 ピistol入れ『伊藤左之允関係
図録』

西洋馬具
仕立全圖

乗馬



図 3 鞍の前のPistol入れを
示す『海国兵談補遺』

入れと馬の腹帯と確信してここに発表するしだいである。それにしても馬具と認定された先人の判断にも感服した。

それでは蘭化の賛の意義は先人も問うたようにこの図と何の関連があるだろうか。岩崎克己は蘭化の賛についての藤浪鑑博士の明治四十三年の『刀圭新報』に載った文を引用した。この文は明治四十三年、蘭化を記念した「蘭化講演」が明治四十三年蘭化の命日の十月十七日に開かれ、選ばれた講演者の藤浪博士が講演の最後にあたり述べられたものである。博士は京都大学での特別講義、富士川游博士の『日本医学史』のなかで述べられた蘭化の賛の内容の解釈に感激されてこれを紹介された。これはニュアンスの差はあるけれど富士川游博士自身がはるか後の昭和十一年に発表されたものと同じである。岩崎の『前野蘭化』に紹介がないのでこれを次に引用する。^(一一)

「私はこの自賛を讀みまして、なるほど人間の智恵と技能とが進歩して追々と色々の發明をし、自然界の一部を支配したりすることが出来ると非常に驕慢になって、それを自分の獨力でしたやうに思ふ。その實我々人間は大なる自然、即ち造化の懷に抱かれて居るところの赤ん坊であることを忘れて居る。人間が一寸ばかりのことをして、それを自分だけの功名手柄にしよ

うとすることは、いかにも驕慢の甚だしきものである。人間がかやうに驕慢の態度を取ることはすべての點に於て不都合であるが学問の研究はもつと謙讓の心にて施さねばならぬ。自分の力が大なる自然の力の一部であるといふことを考へれば、人間が何やかやとやることは、全く造化の力のはたらきの一部であると考へねばならぬ。蘭化先生の精神は實に敬仰に堪えない所であります。かやうな謙讓の心であればこそ彼の蘭学といふことも成就したのでありませう。又一方から見れば我々の力は大なる自然の力の一部である以上、我々の力にてすることは皆自然の大なる力のはたらきの一部であるから、我々は我々として為すべき事に一生懸命となり、目前の功果などを考ふべきではありませんぬ」。

富士川博士は前野蘭化のこの贊文を非常に好まれたことは、田中助一^{すけいち}博士の『防長医学史』に序文を書かれる際にこの文を色紙に自筆されて田中氏に与えられこの本の扉絵となつてゐることもわかる。

以上に述べたように蘭化の贊の文は岩崎氏の蘭学中心の意見、富士川、藤浪両博士の學術研究上の教訓的な意見、中尾、三木両氏の『解体新書』中心の意見があるけれども、私には人間の努力のむなしさを歎き、しかし時勢すなわち自然の勢で世は開けるのだと自分自身また甫周のような同志をなぐさめてゐる言葉ではないかと思ふのである。それは蘭化の自画自賛図が彼の死の十年前、寛政五年（一七九三）、少くともそれ以後でもこれに近い年に、たぶん桂川甫周宅で執筆されたものと推測するからである。

ロシアの女皇エカテリーナ二世の命を受け、最初の遣日使節の陸軍中尉ラクスマンに乗せた船、エカテリーナ二世号は寛政四年九月三日根室湾に到着した。日本漂流民大黒屋光太夫ら三名を日本に返す機会に、日本との貿易を望んだのであるが、松前藩との交渉に手間取つた。急をきいた幕府から目付の石川忠房^{ただなま}と西丸目付の村上義禮^{よしむね}が交渉のため松平定信の命を受けて宣諭使として派遣され、松前に着いたのは寛政五年三月二日のことで、ロシア使節一行は寛政五年六月八日回航の地、箱館に入港、松前へ陸路をとり道中は互いの護衛兵など総勢四五〇人にのぼり、大名行列に劣らないものもろしさだった。使節と船長は二つの駕籠を連れ、使節らが乗馬を希望する時のため鞍を置いた馬、二頭が馭者に曳かれてその駕

籠の後を追った。会見は六月二十一日、二十四日、二十七日と行われた。宣諭使の兩人はとくに六位の衣冠をつけることを許され、徒目付かちめつけの石川は素袍、小人目付の村上は大紋の装束を着た。

交渉の結果は漂流民二人（一人は死亡）を引きとり、ロシアからの書簡は受けとらず、聞きおくとどまり、和親と通商の希望は長崎でしか通じないとして、長崎入港の「信牌」を与えるにとどまった。船中の手当てとして大麦、小麦、蕎麦、鹿肉塩漬などを贈り、幕府としては漂流民送還の謝礼に、米百俵、日本刀三振りを贈った。ロシア側は世話になった礼として松前藩主に鏡三面、硝子器、寒暖計一個を贈り、宣諭使の二人に大鏡二面、ピストル二挺、種々の硝子器、寒暖計二個を土産物とした。使節のラクスマンの父は漂流民の光太夫の面倒をみた植物学者だが、ツェンベリーの『日本植物誌』を見ていたので、その序文にでてくる桂川甫周と中川淳庵の名を知り二人への手紙で標本数点を宣諭使に托した（文中の傍点に注意されたい）。

以上のことを平岡雅英氏の著書で知ると、使節らは乗馬の用意のために自国産の鞍をもってきてそれにはピストル入れがついていた。二挺のピストルは二個のピストル入れとともに当然、宣諭使に贈られた。このピストル入れをたぶん石川忠房がラクスマンからの甫周らへの手紙とともに幕府侍医の桂川甫周のもとに持ってきた。そのピストル入れとこれまたロシア製の馬の腹帯が蘭化の前にあるとして不自然ではない。なお中尾氏のいわれるように蘭化の着ているものが馭者の装束ならば、そのときの馭者のものかもしれないし、または中尾氏の着た礼服の素袍かもしれない。

文化元年九月露国使節レザノフが仙台の漂流民を護送しラクスマンにかつて与えた信牌をもって長崎に来たが、そのときの図を写生したものが、伊藤家に残る敬貞の画いたピストル入れであつたらうと思われる。

ラクスマンが松前に現われた頃、ロシアの内情についての専門家は前野蘭化と桂川甫周であつた。蘭化は『東砂葛記』を寛政元年に、『東察加志』を寛政三年に、『魯西亞本紀略』『魯西亞大統領記帝紀篇』を寛政五年に書いており、最後の二書はロシアの歴史について書いたものだが、桂川甫周は同じく寛政五年に『魯西亞志』としてロシアの地誌を記した。

なお甫周は漂民大黒屋光太夫と磯吉とが八月十七日江戸に廻送され九月十八日將軍の漂民御覽があったときの模様を『漂民御覽之記』として寛政五年に書き、また幕命によって、光太夫に質問してロシアに関する百科的知識を『北槎聞略』（ほくさぶんりやく）として寛政六年記している。寛政五年の蘭化と甫周の著述をみれば二人が共同してロシアの研究をしたことが推測される。

蘭語研究は蘭化の一生を貫いている。しかしこれは蘭書を読んで西欧の学問の知識を知るためである。長崎屋に蘭人を尋ねて問答する必要をそれほど感じず、蘭會話は甫周や中川淳庵より不得意であったであろう。しかし蘭書を読むことはその死に至るまで当代随一であった。蘭化は杉田玄白らとともに『解体新書』に没入した時代があった。しかし玄白ほど、それに重点をおいたわけではない。彼は西欧の自然科学および科学思想を理解しようとして多くの書を著わしたが出版しなかった。名声を得る気持ちもなく、誤解されて研究のできなくなることを恐れた。晩年の彼は西欧の合理主義、それによる生活法、国家の在り方に想いを致した。

尊皇攘夷という言葉はよく使われるが、ここで新しい語彙として尊皇開国をつくり、蘭化晩年の考えを要約したものと考へたい。開国の思想は当時の杉田玄白はじめ本多利明、司馬江漢、朽木昌綱など蘭学者のほとんどすべてにみられるが、尊皇思想は蘭学者のなかでは蘭化を最初とすると思う。もちろん当時のこととて蘭化にその言や、その書があるわけではない。中津藩士で武道指南の築次正（一五）は前野蘭化と同じく中津藩奥平家の江戸中屋敷内におり、蘭化は尺八の宗動流、次正は指田流の名手だった。築次正と高山彦九郎は兄弟のように親しくなり、彦九郎を蘭化に紹介し、蘭化は妻子ともども彦九郎と親しくなり、彦九郎は江戸では前野家に家族のように出入りしていた。蘭化は彦九郎に西洋事情を教え、彦九郎が京都にいる桃園天皇の侍読、伏原宣條（ふしはらののぶちか）と親交があったので、蘭化は伏原を通じて天皇に西洋事情を説明したいと考へていた。

北海道についてロシアに近い東北、とくに仙台藩の蘭学者たちは当然ロシアに関心が深く、蘭化と縁が深かった。工藤平助、その弟分の林子平、平助の推薦する大槻玄沢などである。

寛政二年に蘭化は中津藩医を辞し、一子、長男の良庵に後を継がせたが、翌三年良庵を亡くし、次の寛政四年には妻瑛子を失った。蘭学を理解し後援し工藤平助の著す『赤蝦夷風説考』(一七八三)の意見に同意し、蝦夷地開発の政策をとった田沼意次は天明六年に追放され、天明七年に蘭学嫌いの松平定信が老中となり、寛政の改革が始まった。田沼時代に無事だった林子平の『三国通覧図説』は定信時代となると、天明六年五月脱稿、八年第一巻刊行で寛政三年全十六巻が刊行の運びとなった『海国兵談』とともに、刊本はもとより版本まで没収され、子平は兄の家での蟄居を命ぜられた。定信の方針が「憂国の心はあるべし、憂国の語あるべからず」(『花月草紙』)だったからである。

寛政五年は蘭化にとって愁眉を開く年であったはずである。この年の七月松平定信は老中を辞職せざるを得なくなり、天明六年以来、寄合となっていた桂川甫周は再び侍医に復帰した。晩年の蘭化をもっともよく世話した大垣藩医、江馬春齡は、この年良沢の門に入り、次年には蘭化の弟子大槻玄沢はオランダ正月といわれる新年会を祝うことができた。寛政五年は蘭学にとってめでたい年のようであった。しかし蘭化にとってはそうではなかった。寛政三年の良庵の死、四年の妻瑛子の死が後をひくばかりではなかった。高山彦九郎は追いつめられたと知って九州久留米で自刃、林子平は六月二十一日幽門のまま五十六歳で病没した。彦九郎の死の六日前のことである。多くの志ある人の努力は無駄だった。しかし自然の勢をみれば、世はしだいに明るくなるだろう。この心境を人にさとられず、彼の心を理解する甫周に伝える語が賛となった。いまロシア問題を甫周とともに論じている彼の前にあるのがロシアの馬具の一部である。その図に「経営漫費人間力、大業全依造化功」と賛をすることになったのではなからうか。彼の頭には『淮南子』の「力征(武力)を以て天下を経営せんと欲す」とか「造化之始まる所、陰陽の変ずる所、これを生としい之を死という。偉なるかな造化なるもの」などの言葉が頭にあったかもしれない。

蘭学者に対する松平定信の弾圧の影響は、シーボルト事件、蛮社の獄と後をひく。寛政五年の蘭化の心境は蛮社の獄で、親しい友、小関三英、渡辺華山、高野長英を失った後の桂川甫賢の心境に似ている。その心をあらわしたのは甫賢の

画く雄鶏の図に書家卷菱湖が筆をとった賛、「風雨凄々鶏鳴不已」である。

文献および注

- (一) 本文は平成元年四月十五日、日本医史学会・蘭学資料研究会四月例会で「前野蘭化の自画自賛図について、前野良沢・山口行齋・高野長英」と題して講演したものである。ただし話の成りたちから、山口行齋・高野長英にふれたものの、時間の都合で話を簡単にした。それで後の二人に関してはくわしく別の文として発表するつもりである。
- (二) 早稲田大学図書館編集『洋学資料圖録』早稲田大学図書館、第七図、一九六八（昭和四十三年）。
- (三) 岩崎克己『前野蘭化』私家版、東京、一九三八（昭和十三年）。
- (四) 木村陽二郎『日本自然誌の成立』二〇三頁、中央公論社、東京、一九七四（昭和四十九年）。
- (五) 小川鼎三『前野良沢』（郷土の先覚者シリーズ第五集）大分県先覚者シリーズ刊行会、五〇～五二頁、一九七五（昭和五十年）。
- (六) 筆者が長崎大学経済学部の武藤文庫の一冊、山口行齋旧蔵、高野長英の蘭訳の草稿の閲覧を希望した。その最後に記された武藤長蔵博士の説明文中に伊藤醇の名のあることに注目して武藤琦一郎氏は、伊藤奎之允以来の蘭学関係の図や文を四代目伊藤盛吉氏が現在所有されていることをつきとめ、琦一郎氏の案内で緒方富雄、小川鼎三両博士、写真の開祖上野彦馬の子孫上野一郎氏代理の広田寿亮氏と筆者が、昭和五十一年十一月六日に伊藤盛吉氏を訪問してそれらを拝見した。緒方博士はただちに「伊藤奎之允関係文書の一部の紹介」と題して十二月十八日の蘭学資料研究会と日本医史学会との合同例会でこれを紹介した。
- (七) 緒方富雄稿「伊藤奎之允関係文書目録」『蘭学資料研究報告』三二三号、一九七七（昭和五十二年）。
- (八) 緒方富雄編『伊藤奎之允関係文書圖録』緒方医学化学研究所、X～B図、一九七七（昭和五十二年）。
- (九) 杉田成郷参閲、市川斎宮訳解『遠西武器図略』天眞楼蔵版、江戸、一八五三（嘉永六年）。
- (一〇) 林柳圃『海国兵談補遺』一八六七（慶応三年）。山岸徳平、佐野正巴共編『新編林子平全集』兵学』第一書房、東京、一九七八（昭和五十二年）再収。
- (一一) 藤浪鑑「所謂片山地方病（広島県に於ける日本住血吸虫類）の研究」『刀圭新報』二卷三号、八七～一〇八頁、一九一〇（明治四十三年）。

- (二〇) 富士川游「前野蘭化先生」『日本医事新報』第七九三号、四〇七九頁、一九三七(昭和十二年)。
- (二一) 田中助一『防長医学史』上・下巻、一九五一、一九五三(昭和二十六年、二十八年)。
- (二二) 平岡雅英『日露交渉史話』高野明解説、原書房版、一九八二(昭和五十七年)。初版はナウカ社一九三四(昭和九年)、再刊は筑摩書房、一九四四(昭和十九年)。
- (二三) 前野良沢と築次正、高山彦九郎との関係は文献(四)の前野良沢の文献(三六四頁)を参照。
- (二四) 木村陽二郎「桂川甫賢」、緒方富雄編『江戸時代の洋学者たち』一七二〜一七六頁、新人物往来社、一九七二(昭和四十七年)。
- (二五) 今泉源吉『蘭学の家、桂川の人々(続篇)』篠崎書店、口絵、二九五、五四一頁、一九五八(昭和四十三年)。

Answering some remaining questions about Ranka Maeno's self-portrait.

by Yojiro KIMURA

Ranka Maeno (1723~1803) was a famous "Rangakusha", a scholar of European studies through Dutch books.

Until now, the objects placed in front of him in his only existing self-portrait (Fig. 1) were unexplained.

The author concludes (after close inspection of the drawing preserved in the Itoh's house, Fig. 2, and the drawings from two other books, Fig. 3) that they are two pistol-sacks and a saddle girth manufactured in Russia.

In addition, the author suggests the real meaning of the sentence written on the self-portrait.